

佳作賞

「ベタ踏み坂」

『てくる』17号

南 奈乃氏

南 奈乃（みなみ・なの）

一九五九年十一月六日生まれ、奈良県在住

大谷大学短期大学部国文科卒。

大阪文学学校研究科修了。

「てくる」会員。

「真つ白な帆に風を孕んで」で第九回文芸思潮エッセイ賞奨励賞を受賞。

大人のための朗読会「響」メンバーとして県内各所で出前朗読を行う。

無事故無違反の優良運転者として生きてきた。

売り上げが上がらない雨の夜、再びこの前の男がタクシーに乗ってきた。閑空までという長距離である。男に「肌がきれい」と久々に女性扱いされ、身の上にも同情していた私は、大阪への近道である峠越えのルートを走る。峠から見える大阪の夜景の素晴らしさを男に見せたかったのだ。急な上り坂をアクセルを踏んで登っている時に、男は「こういう坂を、ベタ踏み坂っていうんですよね」と言う。そして、津波が迫るなか、こんなふうにも自分もアクセルを踏み続けて津波を逃れたが、振り向いたら妻の車がなかったことを語る。男の話に、私は十五年前の辛い自分を重ね合わせる。

目的地の手前で、男はトイレに行きたいと言い、信用しきっていた私はコンビニに車を停める。大雨のなか出て行った男は、そのまま姿を消す。乗り逃げをされ、男の住んでいる大手電機メーカーの寮に行ってみるが、そんな男はいないと言われ、嘘だったことがわかる。

それから一カ月ほど過ぎ、走行中タクシートのドアを開けて客が転落し死亡するという事故が起こる。運転手が、回覧されていた乗り逃げ事件の男だと主張する。所長に言われ防犯カメラの映像を確認した私は、男の死に責任を感じない。一方、男が残したアタッシュケースは警察に渡せないまま、事情聴取で男の手を車のドアに挟んだことも言い出

「ベタ踏み坂」

私は女性タクシードライバーである。奈良県北部で、塾へ行く幼稚園児や病院へ行く高齢者の送迎をしている。独身で四十代後半になり、故郷の吉野には高齢の母親が一人暮らしをしている。家庭を持つ姉が、母のこれからを相談してくる。

ある日乗せた男性客は、昔姿を消した恋人誠司をどこか思い出させた。男は関西訛りがなく、聞くと東北大震災で妻を亡くし、母親は行方不明だという。私は被災者に接するのは初めてで同情する。タクシートの降り際、不注意で客の右手をドアで挟んでしまう。男は大丈夫だと言い、私は良い客で良かったと思う。

OLだった十五年前、喫茶店を開くという夢があり、こつこつお金を貯めていた。行きつけの喫茶店で知り合った誠司は、その喫茶店が売りに出た時に、一緒に店をやるかと持ちかけた。誠司との結婚を夢見て、私は貯金の他に母親や姉をはじめあちこちで借金して資金を作った。誠司は自己破産していて借金ができなかった。

契約の日、誠司はその資金を持ち逃げした。借金を背負った私は、不況もあって仕事を選べずタクシードライバーとなった。そして上司のセクハラも気にせず、十五年の間せないままになった。

仕事への自信を失った私は、母親に連絡せぬまま吉野の実家へ帰る。母親は留守で、勝手に入った私は、母のために自分がこの家に戻る気はないことに気づく。家を出て車で国道に戻ると、姉から電話がかかってくる。母親は勝手に老人ホームに入居を申し込んでいて、二人で下見に来ているという。私は、実家へ来たことを言えずに電話を切る。その夜、寝ていて金縛りになった私は、一人でこれから生きて死んでいくことへの恐怖感にさいなまれる。

その後、新聞に亡くなった男の名前が出て、彼が実は妻の元を失踪していたと知り、誠司の死を新聞で見たくないと思う。

酷暑の中、ぬいぐるみのクマを抱いた若い女性を乗せる。イギリスに住む白血病を患った少年の代わりに、旅をしているぬいぐるみだった。見せてもらった少年の写真に、送迎している幼稚園児早希の姿が重なり、自分も何かしたいと思う。女性に頼まれ、ずっと避け続けていた喫茶店に入ったことで、久しぶりにコーヒを味わう。

営業所に戻ってきた私に、所長は「珍しく機嫌良さそうやな」と声をかける。